

透析医のひとりごと

「新型インフルエンザ雑感」 隈 博政

2009年はH1N1新型インフルエンザの大流行で大変だったが、診療報酬改定、参議院選挙など大きな問題が次々と起こったので、もうずいぶん以前のことに感じられる。

2008年の初頭から福岡県透析医会が高病原性のH5N1トリインフルエンザ対策に取り組み、4月に「新型インフルエンザ 通常のインフルエンザ対策」という演題の学術講演会を開催した。5月には福岡県保健医療介護部保健衛生課を訪問して透析患者の特殊性を説明し、リスクを抱える透析施設にタミフルを配布してもらう約束を取りつけた。日本透析医会も秋葉隆委員長の下で新型インフルエンザ対策に取り組み、12月には「ガイドライン」を会員に広報した。

2009年4月24日に突然、H1N1新型インフルエンザ（豚由来）によりメキシコで61人が死亡した可能性があり、米国でも感染例があるという報道がなされた。ここから、ご存じの大騒動が始まった。

当院では、人が広範囲に移動する5月の大型連休中には国内発生がありうると考え、5月4日から職員も患者も全員マスク着用、入り口は1カ所とし、非接触型体温計による検温とアルコール手指消毒を義務づけるなど厳戒態勢をとった。患者から「いつまで続けるのですか」という声が出始めたが、5月16日に神戸市内で複数の患者発生が確認され、兵庫県・大阪府に広がったので、患者に説明して厳戒態勢を続けた。

日本透析医学会開催中の6月5日に、福岡市板付中学の1年生が発症し、以後集団感染が確認された。皮肉な事に、この集団発生地にもっとも近い透析施設がくま腎クリニックであった。

板付校区内では、5月末から簡易検査で「陽性」と診断され新型インフルエンザが疑われる小中学生や成人が相次いでいた。複数の医師が再三、市の保健所に精査を要請したが、保健所は「渡航歴や関西での滞在歴」という検査基準にこだわり続け、PCR検査を拒否していた。この最初の例は、福岡市内ではなく近隣の春日市の救急病院を夜間受診したため、PCR検査にこぎ着けたとの事である。現場の医師の意見が医師会や保健所を通して、素早く取り上げられていたらと思う。

これに先立つ5月25日に、福岡市近隣の志免町で米国人男性の感染が確認されていた。この米国人男性は来日翌日の5月23日夜、板付中学校区内にある飲食店を利用して、志免町を管轄する県はその事を把握していた。しかし、政令都市の福岡市はこの情報を知らされてはいなかった、との事である。板付中学の最初の感染例と、米国人男性のウイルスは遺伝子の塩基配列が完全に一致したそうである。

地震などの災害や感染症の大流行は、行政の区割りと関係なく発生したり、広がることから、情報の共有がいかに大事であるかを再認識した。今後、心配されている高病原性トリインフルエンザのヒト-ヒト感染

大流行の対策に、このような教訓をぜひ活かしていかなければならない。

同時に、医療側と行政側の各レベルでの協力体制も重要で、お互いの意思の疎通を図ることが必須であると考えます。われわれ透析医においても、個々の医療機関で具体的な対策を立て行動し、保健所単位での行政との協力関係を築き、さらには郡市医師会単位、都道府県医師会単位、国（厚生労働省）レベルでの行政との協力をしていくことが求められる。それぞれの規模、立場でしか行えないことが多々あるからだ。

医療法人明楽会 くま腎クリニック

